

大栄西瓜のブランド力強化支援 ～スーパーブランドを目指して～

東伯農業改良普及所

1. 取組の背景

大栄西瓜は、消費者や市場から「でかい（3L中心の大玉）、うまい（シャリ感がありおいしい）、数量がある」産地として高い評価を得ている。

歴史的にも、明治40年に栽培が開始されてから100年を経過する中で、幾度も困難に遭遇してきたが、先人たちのたゆまぬ努力と多くの消費者に支えられ、全国屈指の西瓜の産地として成長してきた。その結果、ブランドとして定着しているが、さらなる発展を図りたいという思いからスーパーブランド化を目指すこととしている。

近年、春先の低温や干ばつ、猛暑など過去に経験したことのないような異常気象の中で、生産者のみならず市場関係者からも、安全で信頼できる産地として、安定生産・安定出荷が求められている。

また、大栄地区ではハウス栽培と露地でのトンネル栽培をあわせ、257戸が182haで栽培している。ハウス栽培から露地トンネル栽培へと切り替わる時に出荷量が少なくなる出荷の谷間ができることから、県の補助事業（チャレンジプラン支援事業）等を活用しハウスを増棟しているところだが、ハウスでは急性萎凋症の発生が課題となっている。

このような課題をひとつひとつ解決することが、大栄西瓜のブランド力を高めることにつながると考えている。

2. 活動内容

県は、大栄西瓜組合協議会（以下「協議会」という。）の組織活動を、JA、町等の関係者とともに応援しているところであり、特に普及所では栽培技術面の支援を中心に活動を行った。

（1）ハウス栽培における急性萎凋症の発生原因の究明と対策の実施

ハウス栽培では、急性萎凋症の発生により収穫前に株が萎れ、収穫できない事態となり生産者を悩ませている。年ごとに天候が異なることから原因の特定を難しく、気象変動（温度、土壤水分（乾湿））をデータ化して、急性萎凋症の原因究明の参考としている。

また、病害虫診断、土壤の化学性や物理性の診断を行い、その中で土壤水分が関連すると思われる場合には、土壤水分計に基づいた適正な水管理（灌水）を生産者に提案している。



写真1：圃場での調査

(2) 国のガイドラインに基づいたGAPの取組への提案と実施の支援

平成22年度からGAPの取組を協議会、JAに提案し、平成23年度は協議会役員、平成24年度から協議会全体でGAPに取り組み、安全安心への意識向上を図っているところである。

また、生産者個々が提出したGAPのチェックリスト(点検票)の取りまとめ結果の点検を行い、改善点を提案している。



写真2：GAP研修会

(3) 土壌分析結果(化学性)に基づいた土壌診断

ハウスでは、前作の肥料が残りやすくなっている傾向があることから、15戸の土壌分析を実施し、次作の西瓜の施肥設計に活かしてもらっている。

また、ハウスの土壌分析の必要性を指導会等で説明し、JAが実施する土壌分析の利用を勧めた。

(4) 女性グループの技術習得支援

女性農業士をリーダーとする西瓜生産者等女性12名が「基礎的な西瓜の勉強をしたい。」と要望があがり、平成24年11月から月1回勉強会を実施している。



写真3：女性グループの勉強会

(5) 新規就農者の就農支援

新規就農者のうち、農業基盤のない新規参入者が西瓜でも出てきていることから、就農前後の個別の支援を行っている。

3. 具体的な成果

(1) ハウスでの急性萎凋症の原因の究明と対策の実施

圃場によって急性萎凋症の原因は異なることから、1圃場ごとの原因を特定し、水管理や薬剤処理などの対策をとることによって、14戸の急性萎凋症の発生をほぼゼロにし、安定生産につながっている。水管理においては、どちらかと言えば、生産者の経験と勘による水やりとなっているところに普及所の土壌水分データによる裏付けをとることによって、生産者に納得してもらいながら対策を実施し、安定生産につながっている。

(2) 国のガイドラインに基づいたGAPの取組

平成24年度から協議会全体でGAPに取り組み、GAPの認知度も高まりつつある。生産者が257名と多く、チェックリストの回収も簡単ではない中、平成24年度の回収率は81%、平成25年度の回収率は87%と高くなっている。

また、GAPのチェックリストの取りまとめ結果から土壌分析の実施率が低いことがわかり、土壌分析の必要性を提案し、JAでの土壌分析の実施率が平成24年度

の13%から平成25年度の21%と向上した。

(3) 土壌診断を参考にして減肥と施肥削減

ハウスの土壌分析結果から前作の肥料が残りすぎている生産者には施肥削減を提案し、平成25年産では3戸のハウスで施肥削減を行いコスト低減にもつながった。

(4) 女性グループの技術習得支援

女性グループを対象にした勉強会を開催し、毎回、熱気・やる気に満ちた会の雰囲気となっている。西瓜の基礎的な生理や栽培について勉強することによって「何のために言われた作業をやっているのか。」という目的意識を持って作業できるようになっている。

(5) 新規就農者の就農支援

農業後継者以外の農業基盤のない新規就農者が平成25年2月に1名、平成25年8月に1名、平成26年8月就農予定で現在研修している1名と徐々に増えている。

平成25年にはじめて一人で西瓜栽培を始めた新規就農者1名は、ある程度の研修を受けてから就農したものの、いざ栽培してみると収穫前に急性萎凋症が発生し、品質、収量とも計画を下回った。当初はなぜ発生したのか理解できない様子だったが、その原因を作業面、天候面から振り返り問題点を拾い上げ、次年度への対応策を確認することができた。

4. 農家等からの評価・コメント

- (1) 「過去に経験したことのないような異常気象の中で、経験と勘だけでは栽培が難しくなっている。普及所の調査データを見ると、数値・データの重要性がわかり、参考となる。」（調査協力生産者K氏）
- (2) 「なぜ、この作業をしているのかとか女性だけの会なので質問しやすい。勉強会で学んだことを、家族に話して共有している。」（女性グループ員S氏）

5. 今後の展開等

栽培面積が年々減少し、流通関係者からも「出荷量はこれ以上減らさないで欲しい」という要望が出ていることから、より面積維持の取組が重要となっている。

また、新規就農者でも失敗が少なく栽培しやすいようになってくれば、高齢化による面積減を食い止めることができると思われる。

さらに、生産者にGAPの取組が定着すれば、これまで生産者、JA、市町村等が一体となり築いてきたブランド力がさらに高まると思われるので、普及所として大栄西瓜が「スーパーブランド」として認められるように支援していきたい。

（執筆者：福田 義博）